

読本『近江県物語』における

中国戯曲『笠翁伝奇十種』の利用法の一端

—常人の人物像と小道具「笏」を中心に—

任 清 梅

はじめに

『近江県物語』は文化五年（二八〇八）に出版された石川雅望の長編読本である。これが清代李漁の『笠翁伝奇十種』の「巧团円伝奇」を翻案したものであることはすでに周知のごとくである。⁽¹⁾

『舶載書目』（大庭脩編 一九七二年）によると、『笠翁伝奇十種』は元禄十三年（一六九二）と享保十三年（一七二九）に日本に舶載されたとの記録がある。『近江県物語』以外にも、雅望の他の二つの読本『天羽衣』と『飛驒匠物語』が、それぞれ『笠翁伝奇十種』の「奈可天伝奇」と「蜃中楼伝奇」の趣向を利用している。⁽²⁾ここからも、石川雅望が、いかに李漁の作品を愛読し、その作品から影響を受けていたかが分かる。雅望は天明八年（一七八八）に大田南畝主催の「訳文の会」の参加に始まり、以後、漢籍の和訳に研鑽を積み、成果として『通俗醒世恒言』を寛政二年（一七九〇）に出版している。

戯曲の文体と白話小説の白話文体を雅望がうまく把握し、吸収しているところから、彼の漢文・漢文学の造詣の深さが窺える。

本論文では、今まで明らかにされていない『近江県物語』における常人の人物造形と小道具の「笏」に着目し、「巧团円伝奇」の利用法の一端を明らかにしたい。また、常人によって生じる笑いと滑稽は、雅望が『笠翁伝奇十種』にある「醜角」の滑稽から影響を受けたものであるという結論に導きたい。

一 『近江県物語』と「巧团円伝奇」の粗筋

便宜上、「巧团円伝奇」と『近江県物語』のあらましを纏めておく。姚克承（姚繼）は、一人の秀才である。（傍線部は筆者、以下同）彼は、両親に死なれ、一人で生活している。よく夢の中に、一つの小楼が出てくる。その二階のベッドの後ろに玩具箱があり、これには自分小さいときに遊んでいた玩具類が入っている。

隣に住んでいる曹玉宇（姚器汝）は姚克承のことを気にいり、彼を娘の曹小姐の婿にしようと考えてる。乱世の中では、学問をしていますが、出世できないから、曹玉宇から商売を勧められた姚克承は旅に出た。出発前、姚は曹小姐から詩の書いたハンカチを贈られた。旅の途中で、姚は自分を売る翁に出会い、彼を買って、父親にした。また、賊たちが女の人を袋に入れて、売っているのを聞いて、自分の婚約者かもしれないと思って、買ってきたところ、一人の姥であった。そこで、この姥を母親にした。姥から、自分の貞潔を守るため、巴豆を体に塗り、病気を装う烈女のことを聞き、買いに行くと、婚約者の曹小姐であった。後に、すべてがわかってきたが、買ってきた翁と姥は、実は、自分の本当の両親であった。夢の中の小楼は、自分の住んでいた家であり、その二階にあった玩具類は、夢の中に出てきた玩具類であった。

〔巧団円伝奇〕

村上の御時に、藤原季光夫婦がいた。彼らには、長年子供ができなかったため、妻は長谷寺に祈願し、愛丸が生まれた。しかし、愛丸は三歳の時に、病気で亡くなり、船岡に埋められた。その夜、一人の乞食が愛丸の墓を荒らし、彼の腰に挿してある笏を盗もうとしたところ、愛丸が、蘇り、通りかかった旅人猿丸に命を救われた。

愛丸は、猿丸に育てられ、名前を坂上梅丸に改められた。梅丸が九歳の時に、猿丸が死んで、同じ村の医師橋安世の世話になって、成人した。安世は、一人娘蘭生の婿に梅丸を選んだが、安世の甥常人は、悪知恵を働かせ、梅丸を家から追い出した。

家を出た梅丸は、途中で、武士の嵯峨左衛門に出会い、養子に迎えられる。時に、藤原保輔と藤原斉明が盗賊を従え、横行していた。梅丸は都に上る途中、盗賊の手から西念法師を救った。盗賊が婦人を売るのを聞いて、梅丸は買いに行った。はじめに買ってきたのは、一人の姥であり、梅丸は、彼女を母親にした。姥から、敵陣の中に、巴豆を塗って、自分の貞潔を守る烈女がいるのを聞いて、蘭生だと思い、再び買いに行ったところ、今度は本当に婚約者の蘭生であった。

梅丸は盗賊討伐のため、藤原保昌の所に赴いた。彼は知恵をめぐらし、敵陣に入り、大火事を引き起こし、斉明とその部下を滅ぼした。また、嵯峨左衛門は、頼光の要請に応え、軍勢を率いて、鈴鹿山に籠った保輔を滅ぼした。

最後に、皆は頼光のところ集まり、事の真実が明らかになった。即ち、嵯峨左衛門は、藤原季光であり、梅丸の実の父親であった。養父の縁を組んだ二人は、本当の親子であったのだ。また、買った姥は、藤原季光の妻であり、梅丸の実の母親であった。西念法師は、かつて墓を荒らした乞食であった。頼光は、梅丸と蘭生の仲人になり、二人の結婚を祝った。梅丸は近江椽となり、一家は栄華幸福に暮らした。

〔近江県物語〕

両作品の要約の傍線部を読み比べると、『近江県物語』が「巧団円伝奇」を典拠にして、その筋に従い翻案したものであることは、明らかである。「巧団円伝奇」の男女主人公の姚克承、曹小姐は、『近江県物語』の男女主人公の梅丸と蘭生に変えられ、尹厚夫婦は藤原季光夫

婦に変わり、曹玉宇夫婦は橘安世夫婦に変わったのである。

「巧団円伝奇」と『近江県物語』についての受容関係は、野口寧齋氏の「『袋のうば』の辨」をはじめ、山口剛氏と麻生磯次氏の詳しい論⁽³⁾があるため、それに譲りたい。ここでは、一見しただけではわかりにくいのが、実は「巧団円伝奇」からヒントを得た常人の人物像と「笏」に注目したい。

二 常人の人物像と「巧団円伝奇」

『近江県物語』には、主人公の梅丸に対して、恋敵の人物常人が設定されている。文武両道の梅丸とは違い、彼は、「うまれつき心ひがみ、まがくしきのみならず、芸能の方も、無骨」である。叔父である安世は、そんな彼を見て、自分の家業を継ぐ人ではないとし、梅丸を娘蘭生の婿に選んだ。常人は梅丸を妬み、いつも悪知恵を働かせ、梅丸を家から追いだそうとする。彼は、下女に梅丸が蘭生に贈った聘物を盗み出させた。以前に、蘭生に艶書の歌を送った時に、蘭生からもらった断る内容の歌を聘物につけて、梅丸に返した。梅丸はそこで蘭生が自分を嫌がり、自分と結婚する気がないと信じ、家出をした。

盗賊たちが来ると、常人も慌てて逃げまわった。物騒な世の中であるゆえ、思い切った盗賊に入ったらいと考え、盗賊に入ろうとしたが、旅人の頭を切つてほしいと要求された。臆病な常人は、野原に行つて、死んだ人の頭を拾つて、これを自分が切つた四大天王の一人の頭だと嘘をついたが、その頭を見てみると、女の人の頭である。こ

れが原因で盗賊のリーダーから侮辱されながらも、盗賊に入り、板の風呂の水を炊く仕事を得た。最後、彼は叔父の財産を自分の財産にし、近江の神崎で生活をしていたが、梅丸にその罪を暴かれ、鬼界が島に流された。

従来、常人の人物像については、あくまでも雅望が新しく作つたものであると言われてきた。

例えば、麻生磯次氏は、常人について以下のように述べている。

近江県物語では、かなり重要な役割を持つ人物に、橘安世の甥常人と西念法師とがある。原話にはこれに当る人物は見えない。常人は梅丸の恋敵として現れ、全体の結構を著しく複雑ならしめている。常人は梅丸と蘭生との婚約をねたみ、梅丸の聘物を盗み出し、嘗て蘭生に贈った艶書に対するすげない返事を、その聘物に添へて梅丸に渡し、蘭生が梅丸を嫌ひ居るさまにつくるふのである。梅丸はこれを信じ、安世の家を出奔してしまふ。その後常人は盗賊に加担し、安世方に忍び入り、結局罪を訊かされて鬼界が島に流されるのである。この顛末は原話には全く見られぬ新しい趣向で、江戸の文学では常套手段となつてゐるところの恋敵の趣向を加味し、全体の筋書を複雑にしたのである。⁽⁴⁾

常人の恋敵の役で、全体の筋が複雑になったことは、確かであり、間違いないことである。しかし、常人の人物像を、全く石川雅望が新しく作つたものと言い切つてよいのであろうか。というのは、常人が蘭生に和歌を送る発想や、常人が盗賊に加入する発想は、原典の「巧

団円伝奇』にはすで見られる趣向だからである。まず、盗賊に入る場面を見てみよう。

「巧団円伝奇」の第十出「解紛」と第十一出「買父」では、尹厚を虐める悪少年が登場する。尹厚は親孝行をする養子をもらうため、自分自身を十両で売るアイデアを思いつき、これを掲示板に書き、町の賑やかなところに掲げた。すると、これを聞いた悪少年は何人かを集め、尹厚をからかって、殴った。そこを通りかかった姚克承は、彼らの間に立って、仲介をした後、尹厚を十両の金で買った。後に、尹厚と姚克承が、茶楼で茶を飲んでみると、先ほどの悪少年たちが、また悪い案を考えだし、倍の値段で尹厚を買おうとしたが、尹厚は高い値段にまったく興味を示さなかった。悪少年はこれを見て、仕方なく退いた。帰る時、彼は、こう言った。

前日聽見人説、有個男人生孩子、又有個婦人長胡須。如今又遭
這樁事、種種新聞、都是不祥之兆、明朝的天下、決失無疑了。我
們快快去投闖王、帮他一齊造反、不可失了機會。」（先日男は子供
を産んだやら、婦人はひげが伸びたやらと聞いた。今、またこの
ような不思議な事にあつたのはどういふことだ。各々は、不詳の
兆しだ。明朝の天下は、失うことに決まっている。我々は早く闖
王李自成に身を寄せ、彼の造反を助けよう。今の機会を失つては
いけない。）（『巧団円伝奇』⁽⁵⁾

悪少年は尹厚が金にまったく興味のないことを不思議に思い、今の世の中の不思議な事は天下不祥の兆しであると思ひ、闖王李自成に身

を寄せ、その一員になる事を決めた。

『近江県物語』巻三「ひはぎのうひ山ぶみ」には、賊たちが近江に近づくの聞き、人々が逃げ回るシーンがある。常人もみなと同じく逃げ回ったが、途中、「巧団円伝奇」の悪少年と同じアイデアを思いつく。

（筆者注、常人）かの盗人のせめきたるさわぎに、おそれまどひて、あわてふためき、逃出て、あたり近き大野まで、はしり行けるが、たくはへたる物ひとつもなく、「いづくへゆかんにも、ふびんなり。いかゞせん」と、つくぐと思ひめぐらしけるが、「いまく、盗人どものはびこりて、国々にみちたれば我ごときものいかにとせん方なし。今降を乞て、かれが手下となりなば、のちくなりいでんも、と思ひ定めて、ぬすびともの、あつまりをる所に行きて……」（『近江県物語』「ひはぎのうひやまぶみ」⁽⁷⁾

二重線で引かれた部分を読み比べると、乱世の中、賊に入り、造反人になる発想は、やはり雅望が「巧団円」からヒントを得たことは、明らかである。故に、常人は、まったく石川雅望が新しく作った人物であるとは言えない。雅望は、「巧団円」の悪少年からヒントを得て、常人を賊に入らせることから常人の人物像に着手したのではないかと思われる。まず、「賊入り」の発想があつて、そこからいろいろな要素を加え、常人の人物像に肉つけしていったのであろう。

重友毅氏は常人の人物像について、「常人の如きは、原作には見当らぬ人物で、或ひはそこでは単に一端役を勤めてゐるに過ぎない悪少

年から脱化したものかとも考へられるが、それにしても働きの上に格段の相違がある⁽⁸⁾と述べている。

基本的には、重友氏も麻生氏と同じ意見である。が、一端役として、常人は悪少年から生まれた人物であるとも認めている。

盗賊加担が「巧团円伝奇」から趣向を取ったように、常人の人物像に於いて、ヒントを「巧团円伝奇」から得たものはもう一つある。これは常人と蘭生との歌のやり取りである。

「巧团円伝奇」の第六出「書帕」では、姚克承が商売に出ていくのを聞いて、曹小姐は、自分の気持ちを詩に表現し、ハンカチに書き、姚に送った。その詩は「関関たる雉鳩は、河の洲にあり、窈窕たる君子は、淑女の好迷。(原漢文、以下同)」である。これは、『詩経』開卷冒頭周南「関雎」の詩「関関たる雉鳩は、河の洲にあり、窈窕たる淑女は、君子の好迷。」を捻ったものである。

曹小姐は、自ら自分を「窈窕」たる「淑女」と称えるのをやめ、「窈窕」の二文字を姚克承に使って、「窈窕たる君子は、淑女の好迷」に変えたのである。

これを読んだ姚克承は、曹小姐の賢さに感心し、同じく『詩経』の詩「我に投ずるに、木桃を以てす。之に報ゆるに瓊瑶を以てす。報ゆるにあらず、永く以て好と為さん。」(衛風「木瓜」)を「我に投ずるに瓊瑶、之に報ゆるに木桃。報いにあらず、永く以て好と為さん」に変えて、父の形見の「尺」の上に書き、曹小姐に送った。

姚克承も曹小姐と同じように、自分のものを「瓊瑶」と譬えず、謙

遜して「木桃」に譬えたのである。ここで、男女主人公二人の詩のやり取りが行われることによって、二人の謙遜ぶりや、互いの気持ちが通じ合っていることなどが、気持ちよく読みとれる。

『近江県物語』では、この詩の贈答は、姚克承と曹小姐とにそのまま対応する人物、梅丸と蘭生とのやり取りに移されたのではなく、悪役の常人と蘭生とのやり取りに変えられた。悪役の常人と女主人公との歌のやり取りに変えられたため、原典の男女主人公のような互いを思いあう意味合いがまったく読み取れなくなった。

『近江県物語』巻二「せいがいはい」では、常人は、ひそかに蘭生に心を寄せ、艶書に梅の枝をつけて、蘭生に送った。蘭生は、これを見て、下品だと思つて、艶書も梅の枝もそのまま返したが、それに、「なか垣のへだてもわかで梅が、のなどここにしもにほひきぬらん」と常人を嫌う歌を付けた。

「巧团円伝奇」での二人が互いを思い合う場面が、常人の片思いの場面に転じられたと同時に、悪役の常人を主人公の梅丸の代わりに、和歌のやり取りをさせたことによって、後に物語が展開していき、波瀾が起こつたのである。

前に述べた通り、常人は普段より、梅丸を妬み、叔父の安世が梅丸を婿に決めたのを聞いて、悪知恵を働かせ、梅丸の聘物を盗み出し、蘭生の返歌を添えて梅丸に返したことで、梅丸は家を出た。ここから、物語が始まり、梅丸が実の父である人と出会い、養子の縁を組み、また実の母を買つて、両親と巡り合うことができ、なお出世もできたの

である。

このように、曹小姐と姚克承との詩のやり取りの趣向を、常人と蘭生との歌のやり取りに転じさせたことよって、雅望は常人が後に悪知恵を発揮できるように種を蒔いておいたのであり、それによつて、物語をより複雑化させることができたのである。ただし、その複雑化できたベースには、「原典」の恋人同士（9）の詩のやり取りの趣向を利用しながらも、これを常人と蘭生とのやり取りに変えたという雅望の発想の転換があつたことを忘れてはならない。

以上述べてきたように、常人という人物像を構想する時に、少なくとも、「巧団円伝奇」の悪少年の賊入りの趣向と、男女主人公二人の詩のやり取りの趣向は、雅望にヒントを与えたことであろう。彼は、そこから思案を巡らし、常人の人物像を工夫したのである。盗賊に入る時、人の頭を切つて来いと要求されるのであるが、これは『水滸伝』の林冲が梁山泊に入る時、頭領の王倫から「投名状」を要求される趣向の転用である。（9）盗賊の営を逃げ出した後、途中で密会の男女の芋を横取りし、二人を驚かす一条は狂言「どぶっかちり」によるものであると指摘されている。（10）

このように、雅望は「巧団円伝奇」の盗賊加担の趣向や、男女の詩のやり取りの趣向の上に、『水滸伝』の趣向を活かしたり、狂言「どぶっかちり」の趣向を取り入れたりして、常人の人物像をどんだん肉づけしていった。しかし、常人があくまでも悪少年として描かれていたことから、「巧団円伝奇」の悪少年の延長線上に常人が創作された

ことは、明白である。

三 「巧団円伝奇」の「尺」から生まれた「笏」について

「巧団円伝奇」の第二出「夢訊」において、姚克承は、夢の中で一人の翁に出会い、彼から以下のような言葉をかけられた。

（筆者注、玉尺） 那是後來得的、并非爺娘所賜、妳記錯了。只是一件、玉尺雖不是爹娘所賜、却關係妳的婚姻、也不可拿來丟棄、牢記此言。（尺は、あなたが後にもらったもので、実の両親がくれたものではない。あなたの記憶が間違っているんだ。ただ、この玉尺は両親からもらったものではないけれど、実はあなたの結婚と関わっているものだから、なくしてはいけない。この言葉をよく覚えておけ。）

（「巧団円伝奇」）

ここでは、夢の翁が姚克承の玉尺は実の両親がくれたものではないと語る。即ち、玉尺をくれた、今まで育ててくれた父親が本当の父親ではなく、養父ということになる。養父からもらった「玉尺」は、自分の結婚にかかわる大事なものと伝えられた。

『近江県物語』では、梅丸の結婚に関わる物も設けられて、これは「巧団円」に沿つての翻案であるが、「尺」は「笏」に変えられている。ここで雅望がこの小道具「笏」に附した役割を考えたい。

その前に、まず「笏」の出所を考えよう。梅丸の「笏」は、姚克承のように、養父からもらったものではない。うわべでは、「笏」は梅丸の養父猿丸が形見として梅丸に残した物であるが、実は、「笏」は

梅丸の一歳の誕生日の時に、実の父藤原季光が、梅丸の前にいろいろな物を並べたところ、彼が手に取って、手放さなかった物である。即ち、実の父が準備してくれたものであり、父親と梅丸と二人とも見知った物である。ここで、後に、両親と再会を果たすための伏線が張られているのである。

話を元に戻し、「笏」の役目を考えよう。

雅望は「笏」一つで「一石三鳥」の効果を狙っていたと筆者は考える。一つは、梅丸がこれを聘物として婚約者に渡し、またこれを手掛かりに婚約者を探し出した役目である。二つ目は、離別した両親と再会を果たす信しむの役目である。三つ目は「試児」の伝統で、梅丸（幼名は愛丸）の将来を予言することである。これについては、中国の風習「試児」と関わっており、別稿で論じたため、省略する。⁽¹¹⁾

婚約者を探し出す手がかりの発想は、間違いなく「巧団円伝奇」をそのまま利用している。「巧団円伝奇」では、男の主人公姚克承は、袋に入れられた女を買う時に、女の腰に挿している「尺」を手で確認した後、婚約者の曹小姐であると分かり、曹小姐を買い出したように、『近江県物語』では、梅丸が袋の女を買う時に、彼もまた女の腰に挿している細長い物―後に分かったが、笏である―を確認でき、これを手掛かりに婚約者の蘭生であると分かり、蘭生を請けだしたのである。だが、よく考えてみれば分かるように、「尺」と「笏」は形が似ていて、発音も同じく「しゃく」であるが、実はまったく違うものである。「巧団円伝奇」の「尺」は、物差しであり、姚克承の養父が

布の商売をする時に、布を量るに使っていたものである。しかし、『近江県物語』の「笏」は物差しではなく、朝務の時に仕官が使うものである。この書き換えに雅望の手腕も伺える。「笏」本来の漢字音は「コツ」であり、「骨（コツ）」と通じることを嫌って、「シヤク」の慣用音が用いられる。「尺」を「笏」に変える着想は、日本漢字音を介した産物なのである。この改変により、愛丸が近江椽となって成功する将来を予言しているのである。このような周到な伏線を、雅望は一心がけていて、物語の全体の繋がりを緊密化にしている。

「笏」が婚約者を探し出す手がかりである発想は「巧団円伝奇」から得たものであるが、同じ「笏」がまた離別した両親と巡り合う証拠品になるという構想は、「巧団円伝奇」には見られない。「巧団円伝奇」では、主人公の姚克承が両親と再会を果たした証拠品は、彼がいつも夢で見ていた二階建ての建物と建物の二階のベッドの後ろにある玩具類である。夢で見ていた建物と玩具類とが現実にある物とまったく同じであることに気づいた時に、真実が分かってきたのである。姚克承の買った両親の家はちょうど夢で見ていた建物であり、そして二階のベッドの後ろには玩具類箱があり、そこに入っている玩具類は全て夢で見ていた玩具類であった。即ち、買った両親の建物は自分が小さい時に住んでいた家であり、玩具類は小さい頃に遊んでいた玩具類であり、買った両親は実は自分の本当の両親なのである。

このように、姚克承が両親とめぐり会うのに、大きな力を果たしていたのは夢であり、「尺」とは全く関係ない。李漁は婚約者を探し出す手

がかりと両親とめぐり合う証拠品とをそれぞれ別に設置したのである。『近江県物語』はどうかであろう。

『近江県物語』では、反乱を平らげた後、みんなが頼光の邸に集まり、梅丸が聘物として菌生に渡した物が開けられ、その中から「笏」が現れた。「笏」を見た藤原季光は、「これこそ我子愛丸が死しける時、こしにさ、せて埋めたつる笏なれ。」と怪しんだが、養父猿丸の遺言の手紙を読むと、康保元年三月十九日船岡の山から拾った子供であると書いてある。これは、愛丸の没日と埋められた場所とぴったり合った。そこで養子養父である二人は実の父子であること、買った姥は実の母親であることが分かったのである。

「巧団円伝奇」のように、雅望は夢を利用しなかった。この再会を果たしてくれる証拠品はやはり「笏」に託された。何かの証拠品によって、離別した夫婦や、親子が再会を果たすのは、中国の戯曲の中にはありふれたものである。同じく『李漁伝奇十種』所収の「玉搔頭」はその一例である。これは玉搔頭を手掛かりに、恋人同士が巡り会った話である。もちろん、再会の構想においては、雅望は完全に「巧団円伝奇」から離脱したわけではないが、しかし、とくに「巧団円伝奇」に拘っていないのが雅望のスタンスである。彼は、離別した親子が再会する時の信に拘っていた。この信は、ほかでもなく、誕生日の時に、父が準備してくれた、梅丸が掴んだもの——笏にしたのである。前にも述べたが、「笏」を實の父親が形見として墓に置くという設定は、後に巡り会う時の証拠品である伏線を張っておいた。雅望は李漁から

学んだが、師の李漁よりもよい腕を見せている。彼は、李漁のように、婚約者を探し出す手がかりと両親と巡り合う証拠品とをそれぞれ別に設定したのではなく、小道具の「笏」一つで二つの役目を負わせたのである。「笏」の小道具は目立たないが、物語全体を通して、確かに一貫して重要な役割を果たしていた。「笏」の小道具ひとつからも、雅望の優れた翻案の手腕が分かる。雅望のもう一つの読本『飛驒匠物語』の中に、瓢箪が設けられ、これは下界に下された男女主人公が巡り会う信となっている。雅望は自分の作品にこのような信を設けることによって、主人公がいろいろと困難を乗り越えた後に、これを手掛かりに、また巡り合うというストーリーを可能にしたのである。

四 常人の滑稽と『笠翁伝奇十種』における「醜角」の笑い

ここで、話を少し変え、常人の話に戻り、悪役の常人の愚かさと思知恵で引き起こした滑稽について考えたい。大胆な推測をしてしまうと、常人によって引き起こした滑稽は李漁の『笠翁伝奇十種』における「醜角」の影響を受けていたのではないかと筆者は考える。

『近江県物語』では、常人によって引き起こした滑稽はいくつかもある。先ほどすこし触れたが、盗賊加担のため、人の頭を切ってくるように言われたが、臆病のため、彼は人を殺すことができず、暗い中で野原に転がっている人の頭を袋に入れて、大口を叩いて、これを四大天王の渡辺源二綱の頭であると嘘をつく。しかし、袋を開いてみた

ら、これは女性の頭であった。盗賊のリーダーは、にたにた笑い、常人を拷問する。嘘が見抜かれた常人は肝がつぶれるほど体を振るわせていた。盗賊は、常人のこの姿に笑いをこらえきれない。

盗賊に入った後、彼は盗賊の金剛二郎と叔父の安世の隠れ家を襲う。そこから叔父の鎧を盗む。夜になって、鎧を背負い、賊営を逃げるが、途中で疲れてしまい、百姓家の穀倉で休む。そこで密会する男女に出会ったが、こっそり彼らが持っている芋を盗み食ってしまった。男女が裸になる時に、男か女かの腋臭が常人のところまで飛んできて、常人は思わず「あなくさ」と声を出したら、二人は驚き、脱いだ服を拾い、慌てて逃げ出すが、途中で転んだりしてさまざま醜態が現れる。これを見た常人は、大笑いする。

常人は鎧を背負って、叔父の元の神崎の家に帰ると、その家の主になって、家の財宝を自分の物にした。盗賊が袋の女を売る情報を得て、彼も菌生がいると思って買いに行った。しかし、買ったのは、菌生ではなく、狂った女性であった。女性は袋から出てくると、常人にだきつき、歌を歌う。常人は、びっくりして女性を捨てようと思ったが、盗賊たちが女を捨てる者は頭をその場で切る、と言ったので、常人は仕方なく女を連れて帰った。皆は「手うちた、きてわらひあへ」た。以上の三つは、常人によって起きた滑稽である。この三点はいずれも読者の笑いを誘う所であり、丁数を大幅に占めている。「投名状」の趣向だけでもかなり面白かったが、雅望はそれで物足りないと感じたためか、拾ってきた頭を女の頭にしたり、常人の嘘をばれさせたり、

読者を笑わせるところを工夫した。

典拠の「巧団円伝奇」には、これと似る箇所が見つからず、笑の要素があまりなかったが、「巧団円」と同じく『笠翁伝奇十種』に属する他の作品を見てみれば、笑いが随所に見られるのである。例えば「奈何天伝奇」や「蜃中楼伝奇」などの中には観客を笑わせる醜角を設定しており、滑稽役を担わせている。まず、「奈何天伝奇」の「醜角」――関素封をみてみる。

「奈何天伝奇」の関素封は世に第一の醜い男であるが、三人の美しい妻を持っている。しかし、三人の妻は、すべて関素封の顔を見たことがなく、騙されて嫁にきたのである。新婚の夜は、暗い中に、何とかなったが、次の日になると、関素封の本当の姿がばれて、妻は相次ぎ家の中にある書房――「奈何天」において出家し、一心念仏する。

そんな関素封の滑稽は、自己紹介から始まる。関素封のニックネームは「関不全」である。顔が醜い上、体中の五官四肢ひとつも完璧なものがないことがその名前の由来である。

関素封の一番目の奥さんは鄒小姐である。結婚の当日は、二人は洞房に入り、蠟燭を使用人が前もって消したので、鄒小姐は関素封の顔を見られなかった。夫婦の事を終え、関素封はやくも夢に入るが、鄒小姐は何らかの匂いで眠れない。それは何の匂いだろうとよく嗅いだら、関素封の体臭である。口、脇下、足、体中に臭わないところがない。鄒小姐は耐えられなくて、天に向かって、「なぜ私はこの蛻螂（関素封のたとえ、糞虫）と寝なければならぬのか」と問う。やが

て次の日になって、関素封は鄒小姐の前に来たら、鄒小姐は大きな声を出して、「この怪物に嫁いでどうしよう」と泣き崩れた。

鄒小姐は関素封の事を「蜣螂」と「怪物」で形容している。一か月を過ぎたところで、鄒小姐は我慢の限界に達し、彼女は「書房」に仏像を安置し、そこで出家した。鄒小姐の出家に対して、関素封は始めは必死に留めたが、鄒小姐の固い態度を見て、今度は罵りに変わった。「臭淫婦、真賤人（筆者注、いずれも女性を罵る言葉）」と叱り、鄒小姐よりもっと美しい女を妻にすると誓った。

関素封は果たして二番目の奥さんを手に入れることができた。しかも、奥さんは、容姿の優れる女性である。しかし、物語の筋はまた、一番目の奥さんと同様で、彼女もまた騙されて嫁に来た後、関素封の醜貌に驚かされて、出家の道を選んだ。

「奈何天伝奇」はこのように、世に稀な醜男子を設定することで、随所に笑いをひき起こしている。観客が劇場でこれを見た時には、笑声が劇場に満ちたことであろう。「奈何天伝奇」においては、関素封は「醜角」であり、所謂主役の「生」ではないが、彼の存在によって、「奈何天伝奇」全篇は明るい雰囲気満ちており、喜劇の結末へと導かれていく。戯曲の中における「醜角」というのは、墨を顔に塗り、外見が醜いところから名前が付けられている。滑稽な言動によって、観客を笑わせるのが、役目である。

『近江県物語』の常人も主役ではなく、梅丸の恋敵として存在するが、彼の存在によって、読本に滑稽と笑いを生じながら、物語の筋を

複雑化にすることができた。

また、もう一つの例、「蜃中楼伝奇」の「醜角」——径河小龍を見てみよう。「蜃中楼伝奇」は唐代の伝奇小説「柳毅伝」を戯曲化した作品である。⁽¹²⁾

洞庭湖龍王——青龍の娘舜華が柳毅とひそかに結婚を約束したが、黄龍はこれを許さない。舜華の叔父である錢塘赤龍が勝手に舜華と径河王の息子との婚約に応じた。舜華と柳毅の婚約に怒った青龍は、赤龍の話を受け入れ、舜華を径河小龍に嫁がせる。

径河小龍は、お腹が空いているかどうかも分からないぐらい、生まれつきの愚か者である。そんな彼に径荷という三十歳の女が付いており、彼に男女の事を教えている。径荷は自分こそ龍の種を産みたいため、径河小龍にわざと間違った嫁の評価基準を教える。嫁を見る時に、一に髪を見る。髪が黒ければ黒いほうが醜い、黄色のほうがよいと。二に足を見る。足が小さいのはよくなく、足の大きい方がよいと。三に年齢を聴く。若いのはよくない、年取ればとるほどよいと、教えた。すると、舜華を見た径河小龍は、頭、足、顔をよく見てから、「不要她。不要她。（彼女はいやだ。いやだ。）」と叫ぶ。母親はなぜと聞いたら、彼は「頭髮是黒狗毛、不是金絲髮。脚是三寸狗爪、不是尺二金蓮。就是這副嘴臉、也不像有一千歲的。（髪は黒く、狗の毛の色のようで、黄色の糸のような金髪ではない。足は三寸ばかり、狗の足の大きさで、尺二寸の大きな足ではない。顔を見てみたら、どうしても千歳の人とは見えないので、良い嫁ではない。）」と説明する。

径河小龍の論理は径荷の教えによるものであるが、彼の愚かさはこれで浮き彫りにされた。みなは彼の理由を聞き、大笑いした。劇場の観客もおそらく大笑いしたに違いなからう。

『近江県物語』で常人によって引き起こされた滑稽や笑いは、「奈何天伝奇」や「蜃中楼伝奇」の「醜角」の笑いや滑稽と共通している。「蜃中楼伝奇」は雅望の読本『飛騨匠物語』に用いられている。彼は、李漁のユーモアに知らず知らずの内に影響されたのである。

雅望が、小説の中に、滑稽と笑いを入れることについて、稲田篤信氏は「当時、『笠翁伝奇十種曲』を読本の中に利用したのは雅望に限らないが、文化五年に集中する三つの読本すべてにこの書が利用されているという事実は、雅望の読本の質をうかがう点で、はなはだ興味深いものがある。ひとつには、清代の喜劇作者に学んで、読本の中に笑話的要素を意識的に導入したということがある。」⁽¹³⁾とのように述べている。

稲田氏の述べた通りである。ただし、稲田氏は大「清代の喜劇作者」に雅望が学んだことと大きく論じただけで、具体的に李漁の『笠翁伝奇十種』から笑話的な要素をどのように取り入れたのか、また常人の滑稽はどこから来たのかについては、言及していない。

雅望は、『笠翁伝奇十種』の「醜角」における笑の要素を見抜き、戯曲のように、自分の作品にも「醜角」を作りあげているのである。『近江県物語』の場合は、常人が「醜角」になっている。「巧団円」の典拠の構想だけではなく、『笠翁伝奇十種』の他の作品に有る滑稽の

要素や笑の要素を自分の作品に持ち込むことから、雅望が李漁の戯曲に大いに影響されていたことが分かる。

まとめ

『近江県物語』の粗筋は「巧団円伝奇」を踏襲している事、即ち、女の主人公が巴豆を塗り、病気を装い、貞潔を守ったことや、男の主人公が「袋の姥」を買い、聘物を頼りに婚約者を順調に買いだしたことなどは、各論で示された通りで、一目瞭然である。しかし、『近江県物語』における新しく附加された趣向と指摘されている部分も、実はまったく新しく作られたわけではなく、やはり「巧団円伝奇」から発想を得て、そこからアイデアが膨らんでいったものであることは考察の通りである。

常人の人物造形に際し、雅望は「巧団円伝奇」の悪少年の賊入りからヒントを得て、常人を賊に入らせたのである。また、「巧団円伝奇」の男女主人公がお互いを思いあう詩のやり取りを、常人と蘭生との和歌のやり取りに転じさせ、物語が波乱万丈になる前提を作っておいた。「巧団円伝奇」の上に、『水滸伝』の「投名状」の趣向も取り入れ、逃走中に、密会の二人を垣間見て、音を出し、二人を驚かした狂言『どぶかつちり』の趣向も取り入れたのである。このようにして、常人の人物像は肉づけられてきたわけである。

「笏」も「巧団円伝奇」の「尺」から思いついたものである。が、原典の「尺」より、雅望は『近江県物語』において、「笏」に新しい

役割を附加した。これは両親と巡り合う証拠品である役目である。

読んで分かるような一目瞭然な趣向はもちろん、目立たないが、「巧団円」を利用してある部分もあるのである。目立たない部分にいろいろな要素を加えたり、新しい役割を附加したりして、翻案をしていくのは、石川雅望が「巧団円伝奇」を利用する特徴の一つと言えよう。

また、常人によって引き起こした滑稽は『笠翁伝奇十種』の「醜角」の滑稽に影響されたものであると考えられる。雅望は李漁の戯曲の滑稽と笑いとに深く感じ、これを読本の世界に転じている。

しかし、『近江県物語』において、すべてが「巧団円伝奇」や他の『笠翁伝奇十種』の作品から構想を得たわけではない。雅望は自分のオリジナリティーをもきちんと出している。

彼は、『源氏物語』『紅葉賀』の冒頭を模したり、『前太平記』の世界を『近江県物語』に利用したりして、⁽¹⁴⁾ いろいろと工夫している。これらの工夫によって、『近江県物語』は一人の少年の伝奇的人生を描くことに成功した。重友毅は『近江県物語』を「原作を凌駕する出来栄えを示してゐた」⁽¹⁵⁾ と評価し、大田南畝は「六樹園（筆者注 石川雅望の号）があらはせる近江県物語をよみて、俗流にあらざることを知れり」⁽¹⁶⁾ と賞賛したのである。

注(1) 「巧団円伝奇」が『近江県物語』の典拠であることを一番早く指摘したのは、野口寧斎の「袋のうば」の辨（『早稲田文学』明治二年（一八六九年））である。

- (2) 山口剛氏は「飛騨匠物語」は「蜃中楼伝奇」を利用していると指摘（『山口剛著作集』巻二 中央公論社 一九七二年）、重友毅氏は「天羽衣」は「奈可天伝奇」の趣向を使っていると指摘している（『六樹園の雅文小説』『近世文学の位相』（日本評論社 一九四四年）第二篇に所収）。
- (3) 山口剛氏は『山口剛著作集』第二巻に「江戸小説史上の一事象」の御論があり、麻生磯次氏は『江戸文学と支那文学』（三省堂 一九四六年）第二章の中に「雅文小説に於ける支那文学の影響」の御論がある。
- (4) 前掲麻生磯次氏の『江戸文学と支那文学』一四〇頁
- (5) 「出」というのは、戯曲で場面を数える量詞である。駒。
- (6) 「巧団円伝奇」からの引用箇所は『李漁全集』（浙江古籍出版社 一九九一年）による。
- (7) 『近江県物語』からの引用箇所は『石川雅望集』（国書刊行会 一九九三年）による。
- (8) (2)にある重友氏著作 二三七頁
- (9) 「投名状」の趣向が『水滸伝』を利用していることは、重友毅氏が前掲論文「六樹園の雅文小説」にて指摘している。
- (10) 鈴木敏也「浪漫小説作家としての石川雅望」『近代国文学素描』（目黒書店 一九三四年）所収
- (11) 拙稿「石川雅望読本『近江県物語』における中国白話小説の趣向利用について―『女仙外史』、『醒世恒言』と『拍案驚奇』を中心に―」和漢比較文学51号 2013年8月刊行
- (12) 「蜃中楼伝奇」の序に見られる。「至如唐人所傳柳毅事甚奇、人艶称之」とある。
- (13) 稲田篤信「『天羽衣』論*綾足・秋成・雅望」『江戸小説の世界 秋成と雅望』に所収 ペリカン社 一九九一年
- (14) 稲田篤信「『近江県物語論』*もうひとつの梅若物」前掲『江戸小説の世界 秋成と雅望』所収
- (15) (8)に同じ
- (16) 大田南畝『玉川砂利』三一五頁 『大田南畝全集』所収 岩波書店 一九八七年